

時は満ち、神の国は近づいた。

三木メイ

奨励者紹介〔みき・めい〕

同志社大学キリスト教文化センター准教授

〔研究テーマ〕キリスト教の実践神学(女性学、人間関係、牧会)

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

(マルコによる福音書 1章14—15節)

新たな「時」の到来

皆さん、2018年度最初の水曜チャペル・アワーによくぞいらっしゃいました。今日初めてチャペル・アワーに参加した人もおられるでしょう。また、過去にチャペル・アワーに参加したことがある方もおられるでしょう。いずれにしても、4月は学校全体にとって新たな学期の始まりですので、チャペル・アワーも新たな季節を迎えた、という気持ちをもって行っていきたいと思えます。

新しい一日、新しい朝、新しい季節を迎えることができるというのは、実に幸いなことだと私は感じています。皆さんにとってはどうでしょうか。朝がくるのは、あたりまえのことであって、特に幸せとは感じない、めんどろな一日が始まるだけと思う人もあるかもしれません。日々の生活が充実して喜びに満ちていれば、新たな一日の始まりは幸せだと感じるでしょう。そして、そういう場合には「時」はあっという間に過ぎていく感じがするでしょう。将来への希望や夢をもっていると、新しい「時」がやってくることは、ドキドキするような楽しみとなります。反対に、何か苦しみや悩みがあり、嘆きと絶望感に打ちひしがれながら毎日を過ごしていると、早くこういう辛い時期が過ぎ去ってほしい、けれどいつまでも辛い、時間の流れが遅いと感じている人もいます。 「時」の流れというのは、時計やカレンダーなどによって、万人共通の時間の流れが知られているのですが、一人ひとりが置かれている状況によって、その「時」の流れの速い、遅いという感覚が違いますね。新たな「時」を迎えても、それを喜べる人もいれば、それを嘆いている人もいます。新たな「時」が到来したことを、どういう意味で捉えるか、どんな心で迎えるかによって、一人ひとりの生活や生き方、価値観に大きな違いが出てくることは、皆さんも想像できるだろうと思えます。

ですから、新しい一日、新しい時を迎えることができたと感じた時には、とにかく生かされてこの時の中にいることに感謝と喜びをもって、新たに歩み始めてほしいと思えます。特に、この恵まれた環境の大学で勉学できるということ自体幸いなことですから、自分なりの夢と希望に向かってしっかり歩いていくことを期待します。

イエス・キリストの最初の「時」

チャペル・アワーの奨励では、いろいろな方々にお話ししていただきますが、一番多いのは牧師や教員に

よる奨励です。牧師の先生方には、聖書の言葉を読み解いて、皆さんにメッセージを語っていただいています。また、学期ごとに統一テーマを設けています。今学期は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」というイエスの言葉をテーマとしています。今日は、この言葉について少しお話をしたいと思います。

この言葉は、約二千年前にイエスが福音を宣べ伝え始めた時のことを一括りにまとめて伝えている言葉です。ですから、現代に生きる私たちが言葉どおりに読んでも、何のことかわからないのは当然なのです。それで、まずこの言葉の中の、「時」と「神の国」と「悔い改め」と「福音」について、一つひとつ説明をしていきます。

先ほど「時」の流れの捉え方は、いろいろあるという話をいたしました。昔のギリシャ語で「時」を表す言葉は二つあって、「クロノス」というのは、一定の速度で流れていく時の流れ、「カイロス」というのは、人間が主観的に感じる時の流れ、内面的な時の流れを指しています。イエスが言った「時は満ち」の「時」は、「カイロス」の方の意味で、客観的ではなく主観的な意味なのですが、さらに複雑なのは、これは個人の主観や内面というよりは、当時のユダヤの人々の社会において共有されていた信仰的な意味での「時」の流れのことなのです。当時は、神信仰をもっているのが当然の時代で、ユダヤ人たちは、神様が与えてくれた救いの契約をずっと受け継いできた民族なのだというアイデンティティーをもっていました。彼らは、自分たちの独立国家が滅亡した後の何百年もの間、外国の支配を受けて苦難を味わってきましたので、いつになったら神様は救いの約束を実現してくださるのか、とその「時」を待ち望んでいたのです。

イエスは、福音を宣べ伝え始める前に、バプテスマのヨハネから洗礼を受けています。その頃、イエスは30歳くらいだったと言われていますが、マルコによる福音書にはそれ以前のイエスの生涯については何も書かれていません。1章1節には、「神の子イエス・キリストの福音の初め」と記してあります。イエスが神の子として、待ち望んでいた神の救いの「時」が来たことを告げ知らせた、その最初の言葉が「時は満ち」なのです。

「神の国が近づいた」

次の言葉は、「神の国」です。これはギリシャ語では「バシレイア」というのですが、「神の支配」とも訳せる言葉です。ですから、神の御心になつた状態で、神の支配が行き渡っているところ、または神の救いが実現された状態、と言い換えることができるかもしれません。しかし、それはどこにあるのか、地上にあるのか、天上にあるのか、またいつその状態が実現するのか、しないのか、誰にもわからないのです。当時のユダヤの人々は、神の救いが完成されるその「時」は、この世の終わりの時だという、いわゆる終末信仰をもっていました。それは新約聖書を読むと、あちらこちらに出てきます。彼らの多くが抱いていたのは、神の救いが完成される終わりの時には、人間のそれまでの人生での行いが神様によって裁かれて、救われる者と救われない者に分けられる、いわゆる「最後の審判」があるのだという信仰をもっていたのです。二千年後の現代に生きる私たちには理解しがたい信仰内容ではありますが、そのようにして神様と自分たちとのつながりを大切に日夜暮らしていくことが、当時の人々の生きる希望であり、また目標だったのです。

しかし、「神の国」という言葉を聞いて、人々がイメージした内容には、かなり多様性があったようです。イ

エスの時代には、ユダヤはローマ帝国の一部としてローマ人の支配を受けていましたから、「神の国」というと、実際的に将来この地上に実現すべきユダヤ人の独立国家を思い描いた人も多かったようです。その独立国をうち立ててくれる、神の子＝メシアの登場を望んでいた人々もたくさんいたようなのです。

そういう時代に、イエスが登場してきて「時は満ち、神の国は近づいた」と語ったのですから、人々は自分たちが抱いてきた夢と希望が実現する時が近づいているのか、と期待したのではないのでしょうか。そういう人々がイエスの周りに集まってきただろうと想像できます。実際に独立運動をしていた熱心党の一人がイエスの弟子になっていたことが聖書に記されています。

しかし、イエスは「神の国はいつ来るのか」と問われて、こう言っています。「神の国は、見える形では来ない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」。つまり、この世的な意味での「国」ではない、また死んでからいく天国のことでもないのです。ただ、神が「良し」とされる、人と人との間の関係性の中に「神の国」、「神の支配」はあると言っているのです。

「悔い改め」＝メタノイア

イエスはローマ帝国からの独立運動はしていませんし、そういう意味で「神の国」という言葉を使ったわけではありませんでした。それは彼が、自分が逮捕される時でさえ、弟子たちに武器や暴力をふるうことを禁じたことでも、明白です。ただ、神の救いを待ち望む者は悔い改めなさい、と告げています。「戦いなさい」などはイエスは言いません。

三つ目「悔い改め」です。この言葉は、ギリシャ語では「メタノイア」と言います。自分を見つめ直して、罪を悔い改めなさい、ということなのですが、原語の言葉の意味を知ると、もっと深い意味が含まれているのがわかります。前半の「メタ」という言葉は、何かを「越える」または「移す」という意味があります。後半の「ノイア」は、人が考えたり判断したりする時の「視点」とか「立場」を意味する言葉です。ですから、「メタノイア」というのは、「あなたのこれまでの視点や立場を移してみなさい、越えてみなさい」という意味なのです。例えば、自分がこう考えるのが正しいのだ、あの人の考えかたが間違っているのだと思うことがあったとしても、相手の立場に立ってものごとを考え直してみると、必ずしも自分の考えが正しいとは言えないことに気づくことがあります。そしてそれは、これまでの考え方の転換、価値観の転換、そして生き方の転換をもたらすことになるのです。今までの自分の考え方、価値観、生き方に固執するのではなく、改めて別の視点、他者の視点、そして神の視点から自分を見つめ直してごらん、そうして新たな自分を見いだしてごらん、と促しているのが「メタノイア」なのです。

「福音」＝エウアングリオン

そして、最後に「福音を信じなさい」という言葉です。この「福音」は、ギリシャ語では「エウアングリオン」と言います。「エウ」は「良い」という意味で、「アングリオン」は「知らせ」という意味ですので、「良い知らせ」というのが、元来の意味です。それを英語に直訳すると、“Good News”なのですが、これを“God Spell”（神の知らせ）と翻訳したので、現在の“gospel”が「福音」という意味の英語になったと言われています。皆さんは、「ゴスペル」と聞くと、音楽のジャンルの名前の一つだとすぐに思うでしょうが、これは元来キリストの「福音」＝良い知らせ、喜ばしい知らせ、を表す言葉ですので、覚えておいてください。

そして「エウアンゲリオン」をラテン語では「エヴァンゲリオン」と言います。そう聞くと、皆さんはあの有名なアニメーション映画の題名だ、と思うでしょうね。私は残念ながらその映画を観たことがないのですが、エヴァンゲリオンというのはその映画においては架空の新しい兵器の名前だそうですから、本来の聖書の意味とは全く異なる意味で用いられているのだらうと思います。

イエスがここで「福音」=エウアンゲリオンと語っている真実の意味を知るためには、イエスがこの最初の福音宣教の言葉を語った後に、人々や弟子たちに、何を語り、何をを行い、どう生きて、どう死んだか、ということ、新約聖書の中から学んでいく必要があります。特に、新約聖書の中の四つの福音書が重要で、そこにイエスの言葉や行動についての伝承が記されています。その中で、イエスが最も大切な教えとして語っているのが、「神を愛しなさい」ということと「隣人を愛しなさい」ということなのです。その二つの教えを信じて生きていくことによって、神の国はあなたがたの間にやってくる、そこに神の救いもあると告げ知らせているのです。

イエス・キリストの喜ばしい知らせ

今日は、「カイロス」「バシレイア」「メタノイア」「エウアンゲリオン」と、ギリシャ語の勉強みたいになってしまいましたが、なにしろイエスが生きていたのは約二千年前で、新約聖書はギリシャ語で書かれていますので、翻訳された日本語だけ読んでわからなくて当然なのです。当時のパレスティナに生きていたユダヤ人がどんな状況で生きてきたのかその時代背景を見ていくことも重要ですし、その言葉の本来の意味をしっかりと考えて、読み解いていくことが大切だということは、少しだけおわかりいただけたでしょう。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という言葉を、私が自己流で言い換えてみましょう。「待ち望んでいた新しい時がやってきた。真実の神の支配(国)が私たちに知らされる時がやってきた。これまでの自分を見つめ直して、新たな生き方へと方向転換して、神からの喜ばしい知らせを信じて、歩いていきなさい」。

二千年前に生きたイエスという一人の人物の「福音」=喜ばしい知らせは、その後世界中に告げ知らされるようになりました。そして、あらゆる民族、あらゆる地域の人々にとっての「喜ばしい知らせ」となってきました。それはとても不思議なことですが、人として何を大切に生きていけばいいのかという共通の課題をもって生きる人類全体に、聖書の言葉は大切なメッセージを今も伝え続けているのです。

私たちは、それぞれに新しい時を与えられて生きています。そのことに感謝しながら、また新たな学びを進めていきましょう。新しい知識や技術を身につけると同時に、人としても成長していけるように、自分の心を見つめ直す時を大切に、新たな学びをしていきましょう。

2018年4月11日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録